

池内さん何かのエッセイで、朝起きると庭のイスで紅茶を飲みながらモーツァルを聴くと、おしゃれなことを書いておられましたね。

**池内** キザっぽいですが、でもそれがいちばん気持ちが楽なんです。とくにピアノソナタはたくさんあって、どれも気楽に聴けますし、音楽の組立てがよくわかる。きまって第二楽章はいまの恋愛音楽にすぐにでも使えそうなくらい優しくて、三楽章でがっつ勢いがつく。そういう作りがわかると、モーツァルトは優れた音の職人だったんだなと感じます。

ヴァイツゼッカー大統領は、国民に対して、「過去を見ない者は、現在も見えなくなる」と語りました。最近では、アウシュビッツの記念日にメルケル首相が「アウシュビッツを記憶することが、ドイツ人の義務である」と演説している。

**川本** 日本の場合、極東国際軍事裁判、いわゆる東京裁判が、いつのまにか、アメリカに押しつけられた不当な裁判だと考えられるようになってしまいましたが、それなら、太平洋戦争を始めた政治家や軍人の責任は、誰が裁くんだという話になる。

**池内** 誰も責任を取らない状況に、日本はしてしまったんですね。いちばんの責任者である天皇を裁かず除外した途端に、東京裁判は、ずいぶん奇妙なものになってしまった。

**川本** 昨年（二〇一五）公開された映画『日本のいちばん長い日』で描かれたように、天皇は軍部に反対して平和をもたらした偉い人、という認識が広まっていますよね。

**池内** 戦争を終わらせるために天皇の「聖断下る」と言われることがあります。まじがった言い方だと思います。実際は、アメリカ側から降伏の勧告を再三受けて、やっと終わったわけでしょう。資料にも残っていますが、アメリカ軍は天皇が何か判断を下すだろうと観察しながら空襲をかけていたので、決断が遅ければ遅いほど、空襲も長引いた。それであれだけ多くの都市が燃えてしまった。さら二度の原爆ですから、本来は「聖断下らず」でしょう。

ニュルンベルク裁判では、ヒットラーもゲッペルスも自殺してしまいましたが、誰かが特例的に裁きから除外されるなどということにはなかった。東京裁判で第一責任者である天皇を除外したのが欺瞞の始まりだというのは、政治学者・丸山眞男が一九五〇年代主張していたことですよね。

**川本** 丸山眞男の有名な論文（「軍国支配者の精神形態」）には、ニュルンベルク裁判におけるナチの高官は確信犯だったが、日本の軍部の責任者はみな責任を上へ上へと持ってゆくと書いています。

**池内** でも、天皇までは持っていかない。

**川本** 姫路も空襲に遭ったんですか？

**池内** ずいぶんやられました。郷里の人は楽天的なのか、アメリカ人はお城を大切に作るから、姫路城のあるこの街には空襲はかけないとみんなが言っていた。たしかにお城は焼けなかったんだけど、町は全部焼けちゃった。

—— 『そして日本は焦土となった』というNHKのドキュメンタリーで初めて知ったんですが、当初、アメリカ空軍の主流は、空軍の仕事は軍需施設への戦略

的爆撃だと考えていた。無差別爆撃は空軍の仕事ではない、と。しかし、日本が降伏しないので、空軍内のタカ派的な幹部が絨毯爆撃を持ち出す。非常に有効だと言って。有効さを説くのに持ち出した例が、日本軍が中国でやった無差別絨毯爆撃なんです。

川本 重慶爆撃ですね。

—— 無差別爆撃のルーツが日本軍だったなんてイヤになります。アメリカ空軍の標的は最初は七都市くらいだったんですが、エスカレートして、県庁所在地が軒並み狙われてしまった。

池内 それでも降伏しないから、中都市にもいった。

池内 行きたいところを記した、自分だけの地図を作っておくと老後は楽しいです。ぼくは自分の好きなところの情報をコピーして、合わせて地図につけておきます。そうすると、ファイルに入れて、一つ一つ取り出せるでしょう。そこと関連している近くの地図を、また入れておいたりするので、コンビニへしょっちゅうコピーに行っています。

ハリウッドはご存じのようにユダヤ人社会

池内 ナチスのような体制は、一度できあがってしまうとどうしようもないので、できつつあるときに止めないといけない。ケスナーが「雪の玉は小さいうちに潰さないといけない。雪崩になったらどうしようもない」と、うまい言い方をしています。

フランソワーズ・アルヌール『ヘッドライト』

川本 喫茶店は居酒屋と同じで、波長の合わない常連がいるところは敬遠してしまいます。目つきの悪い、荒っぽい人が多かったりすると、ちょっと……。

川本 おっしゃるとおりで、私がフリーの物書きになったのは一九七五年くらいですが、このころは雑誌が次々と創刊されていた時期だったために、駆け出しで、しかもマイナスからスタートしている私のような人間でも、どんどん原稿依頼が来たんです。それらの雑誌も、ほとんどはとっくになくなってしまっていますが、当時とはとにかく書く場所がいっぱいあった。いま振り返ると、恵まれた世代だなと思いますね。最近の若い物書きに聞くと、まず書く場所がない。あっても枚数が少なく、継続して書かせてもらうのも難しい。しかも、電子メディアの原稿料は本当に安いらしく、フリーの物書きというものが成立しなくなっていると嘆いています

川本 当時は企業にもまだゆとりがあって、「メセナ」が言われるようになり、企業が文化や芸術を後押ししようという時期でもあった。いまは、お金はあっても、文化事業にお金を出してくれる企業は減っているように見えます。

池内 ぼくらの仕事は編集者との結びつきではじめてできるんですが、その編集者がお辞めになると、われわれの仕事も終わる。ぼく自身が半分リタイア組のようなものですから、仕事はずいぶん減りました。

川本 われわれのころには、旺文社提供の受験番組にハイドンの「時計」が流れていました。あのラジオで「時計」を覚えましたし、「時計」を聴くと大学受験を思い出します（笑）。

川本 前にも言ったと思いますが、江戸時代の日本の文化はかなり高度だったはずなのに、なぜ水洗便所ができなかったのか、なぜビールが生まれなかったのか、なぜ馬車が生まれなかったのか。この三つは、不思議でしょうがない。ビールなんて、日本の温暖で湿気のある気候にピッタリなのに (笑)。

池内 『東海道ふたり旅』の最後には書きましたが、馬車はないけど牛車というのはあったんです。

川本 牛車はあるのに、馬車はない。どうしてだろう？ 馬が貧弱だったのかなあ。

池内 牛に対して馬は、荷物を載せる置物としての存在でした。それも大した荷物じゃないし、馬子が馬子歌を歌って、ポクポク。優雅なものです。